

10月19日（日）主日礼拝レジュメ

「尊敬されて主の栄光を現す」 使徒の働き5章12～16節

12, 13節

新改訳第三版「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。」

新改訳2017「さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心をつにしてソロモンの回廊にいた。ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとしなかったが、民は彼らを尊敬していた。」

→ 問題は、12節の「皆」とは誰を指しているのか、13節の「ほかの人たち（人々）」は誰なのか。

従来の解釈では、12節の「皆」とは、初代教会のクリスチャンたちのことで、13節のほかの人たちとは、未信者であったり、信仰を持とうとしない人たちを指していると考えて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。教会の者たち皆は、心をつにしてソロモンの回廊にいた。クリスチャンでないほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していたとなります。特に、新改訳聖書第三版では、13節を「ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。」と訳していますので、「ほかの人々」と「その人々」は明らかに同じ人たちを指していると思われる。しかし、より妥当な解釈としては、12節の「皆」は、使徒たちのことで、12節の「ほかの人たち」は、使徒以外のクリスチャンたちを指し

ている。つまり、使徒以外のクリスチャンたちは、だれもあえて使徒の仲間に加わろうとはしなかったということ。その一方で「民は彼らを（すなわち使徒たちを）尊敬していた。」ということ。新改訳2017も、この解釈を支持しているように思う。ですから、13節のその人々を民に訳し変えたのではないか。

それでは、なぜ初代教会の使徒以外のクリスチャンたちは、使徒たちの仲間に加わろうとしなかったのか。恐らく教会の中にはユダヤ人指導者の迫害を恐れた人たちがいたのではないか。

4章でペテロやヨハネが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長たち、サドカイ人たちが彼らの所へやって来て、二人に手をかけて捕えた。彼らは釈放された後、仲間のところに行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告したので、当然教会の人たちは全員彼らの身に起こったことや祭司長たちが言ったことをすべて知っていたはず。だから、自分たちが使徒の仲間に加わって活動したら捕まえられることを恐れた。

初代教会にも、いろいろな人がいた。バルナバのような人もあり、アナニアとサツピラの夫婦のような人もいた。4章32節「信じた大勢の人は心と意思を一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた」が、使徒たちの仲間には加わろうとしなかった。ある意味、それで良いのではないだろうか。私たちは、本来教会にあっては、ただお一人神のみを見上げなければならないにもかかわらず、人を見て、人のことが気になる。それが、さばきや周りの人への批判になってしまっているのではないか。私たちは、神ではないので、人の信仰をとやかくいう権利を持ち合わせてはいない。

使徒たちは、自分たちがただなすべきことを行い、自分たちができることを行った。彼らは主のみこころを行うということにおいて一致し、皆は心一つにしてソロモンの回廊にいた。そこに主が働かれて、主ご自身がみわざ

を行われて、そこに主の栄光が現されたということ。15、16節を見ますと、それが病人に対する癒しであることが分かります。そしてエルサレムだけではなく、エルサレム付近の町々から、そして病人だけではなく、汚れた霊につかれた人も連れて集まり、その人々はみな癒された。それが民の彼らへの尊敬となった。

私たちも仕事において主に仕えるようにするなら、必ず尊敬され、家においても親や子どもたちに主に仕えるように仕えるなら、必ず尊敬される。みことばに記されていることを主のみこころとして行うなら、必ず尊敬されるようになる。そのようにして私たちが主のみこころに生き、主のみこころを行う中で、主はそこに働き、そこにみわざをなしてくださり、主はご自身の栄光を現してくださる。使徒たちのみわざを行った結果は、「主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。」(14節)ということだった。主は私たち一人一人が、周りがどうこうではなく、主の御前に忠実に歩み、奉仕をするところに主は働き、みわざをなして、ご自身の栄光を現してくださる。